

福岡県飯塚市幸袋 古民家『聴福庵』（ききふくあん） 神家総本家 第2回天神祭

第90号 2018年11月19日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カギャ 奥山卓矢

天神祭開催の趣旨

福岡県飯塚市幸袋にある弊社の古民家「聴福庵」にて、
「第2回 天神祭」を開催しました。

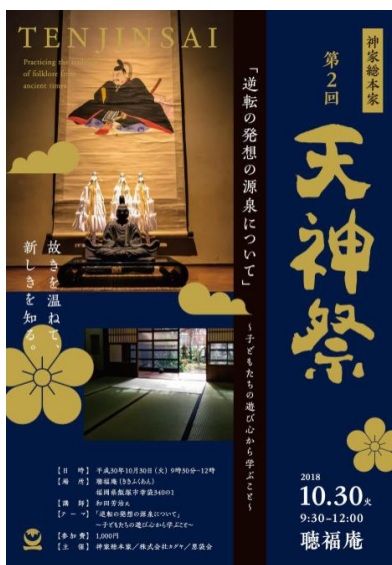
第1回目は、保育環境研究所ギビングツリー代表の藤森平司様に
「子どもにとっての学問とは」というテーマで講演いただきました。

その際、「学問の問は、一体何に問うのか、それは『天に問う』ことで
ある」という言葉に今後の天神祭の方向性をいただき継続して祈りの
祭典を実施することに致しました。

日々の社業を通して昨今の日本の状況や教育環境を洞察していると、
文字や言葉だけで頭でっかちな「教える教育＝現代知識」ばかりで、
むかしから大切に伝承されてきた暮らしの中で涵養されていくような
「教えない教育＝先人の智慧」が疎かになってきていることに危機感を
覚えます。

この先人の智慧の伝承こそが日本人のアイデンティティを形成してきた
私たちの根っここの大切な養分そのものなのです。もしもその大切な養分
を子どもたちが潤沢に受け取ることができなければ、日本人としての
根っこはやせ細り、和合の精神なども深く育つことができません。

私たちがこれから「天神祭」を実施する理由は、むかしから伝承された
「本流の学問」を私たちが子孫へと伝承していくためです。





道真公の木像

天神とは菅原道真公のことで、天神祭は学問の神様の遺徳に肖り古来から傳灯（でんとう）として存在している本流の学問を復古甦生して日本人らしい天を敬い人を愛する人間を育てていくためです。

そして天神様はこの聴福庵のある幸袋の氏神様でもあり、和魂円満の初心を持つ私の祖先でもあります。

天を相手にするカグヤの生き方を、皆様と一緒に味わい本流の学問が子どもたちに譲られていくことを念じております。

神家総本家 初代当主 野見山 広明



玉眼の道真公（江戸時代）

※玉眼：水晶をはめ込んだ仏像

日時：2018 年 10 月 30 日（火） 9：30～12：00

場所：「聴福庵」（ききふくあん）

福岡県飯塚市幸袋 340-1

講師：和田芳治 氏（逆手塾塾長）

1943 年、広島県庄原市生まれ。農業を営む傍ら、2004 年まで総領町役場に勤務。同教育委員会教育長を務める。1982 年「過疎を逆手に取る会」（現在の逆手塾）を立ち上げ、「人間幸学研究所」等の活動を通して、里山暮らしの楽しさと豊かさを提案する。

著書『里山を食いものにしよう』

テーマ：「逆転の発想の源泉について」

～子どもたちの遊び心から学ぶこと～

主催：神家総本家／株式会社カグヤ／恩袋会



道真公のご遺影の掛け軸



菅原道真公直筆の書（個人蔵）
今回の天神祭にて特別公開



道真公直筆の鳥蟲篆書体の書

鳥蟲篆書体の書（ちょうちゅうてんしょうたい）

道真公が大宰府に左遷された際、立ち寄った家での歓待のお礼として書かれた直筆の書。（約1100年前）
代々、守り伝えられ書を今回の天神祭に合わせて、ご厚意により、特別公開していただきました。

書の内容

右の掛け軸：家を離れて三四月。落つる涙は百千行。

左の掛け軸：萬事皆夢の如し 時々彼の蒼を仰ぐ。

訳：二月の初め、住みなれた紅梅殿をたってから、はや三月四月経った。その間、いくばくかの紅涙をしぼったことか。あゝ萬事皆夢ともすれば眼は蒼天を仰いで、人事空漠百事天命と吐息をつくことであろう。昌泰四年 菅公自詠

※昌泰四年（西暦九〇一年）、菅公五十七才の時です。

鳥蟲篆書体（ちょうちゅうてんしょうたい）とは、

篆書体が意匠されたもので、飛ぶ鳥の形や地上を這い回る虫等、その動線美を余すことなく表現したものだそうです。

中国の秦、漢時代のデザイン文字で、殳篆（しゅてん）または繆篆（びゅうてん）とも呼ばれ、皇帝や王侯諸侯が、国民に対して権威と威光を示す為に使用したとされるようです。

赤丸で囲んだ所には、鳥が描かれています。左記の書には、他にも飛んでいる鳥や、木にとまっている鳥達が描かれています。ぜひ探してみてください。

「逆転の発想の源泉について」～子どもたちの遊び心から学ぶこと～

逆手塾 塾長 和田 芳治氏

皆さん、これを掛けていますか。お土産で持ってきました。これは小道具です。これフクロウに見えますね、フクロウは日本の縁起物。裏を見てください。私は目玉でごまかすんですね。これって邪道と言うですね。目玉を木で創る程、能力がないので言葉でだまします。フクロウは、幸福の福と書いて朗らかを書く。お年寄りに贈る時は。老人の「老」を書いたり、もう一つは苦労しないと書く。違うと、苦労をしないと富は来ないので、「富苦労」（フクロウ）と私は書く。

そうしたら去年亡くなった、精神の渡辺和子さん。『置かれた場所で咲きなさい』という本が200万部売れたかな。あの方が亡くなる前に書かれたのが、学歴よりも職歴よりも、苦歴ということを書かれた。20年後はどうなるか分からない。その時に通用する能力は、東大を出てエリートでも必ず逆境が訪れ、それを乗り越える力。苦労した経験だと言われるんです。今はどうですか。何かあったら困りますという言葉は、保護者から出てきて、学校は苦労させないことになってきました。親子キャンプを49年続けているが、50年前くらいには、広島県民の森に、学校からの貸し切りバスが50台くらい入っていた。今はゼロです。何かあったら困りますので、キャンプはしない。「もし、何かあったら」と学校はチャレンジをさせなくなった。もし、何かを起こして、命を落とすようなことがあってはいけない、障がいを持つようなことはさせてはいけない。ただ、もし、何かが起きたときに、乗り越える力を鍛えるのが教育のだと思います。キャンプは、伸ばす部分もいっぱいあります。そういうことを思った時に、これからの教育は色々考えないといけない。教育や学習、そして、学問という言葉があることに気が付きました。学歴よりも、苦歴。そして楽歴。これを基礎学力だと。読み書き・計算は出来た方がいい。もう1つ基礎学力として身に付けて欲しいのが、人生を楽しむ力。人を楽しませる力が楽力（学力）だと思っている。自分の人生を楽しまない人が、人の人生を楽しませることはできない。

私はあくまでも、自分が持てるものを持って、ボランティア活動をしようというので、話は少しずれるが、実はスタートは23歳頃にレクレーションを習う中で、最高にいいと思う中で、知恵遅れの子どものための学園があり、その当時ボランティアという言い方ではなく、奉仕活動と言っていた。そこに素敵な保母さんがいて、彼女に受けるためにどうしたらいいかなと戦略を立てて、奉仕活動へ行ったら褒めてもらえるのではないかと奉仕活動に行った。そうしたら、「和田さん、歌やゲームを持って来ても、うちの子たちは知能指数25ですよ、それは無理ですよ」と言われたら、逆にやる気満々。私ともう一人と、二人で組んで行った。「任せて下さい、やりますよ」と30分しないうちに、子どもたちが抱き付いてくる。ゲームも何も出来なかった。アコーターが泣いていた。私も涙が流れた。奉仕活動に代償は無いというけれど、「これは大変な代償があるぞ！」ものすごく感動させられた。「社会教育をやってよかったです」と言われていたが、遣り甲斐がないなと思っていた時に、子どもに褒めてもらって嬉しかった。「もう、奉仕活動はやめます。遊びに来させてください！」と言った。ダウン症の子や、色々な形で問題がある子がいたが面白い、楽しい。その後も何名か連れて行ったが、子どもたちを喜ばせるために、最初はオーバーアクションしていたが、次第に自分たちが癒されていた。

QRコードからお願いします。